



KICK OFF 通信

人を育て、街づくりを担う！

◆我が国の公共文化施設

どこの街でも見かける文化施設。そこにはホールがあり、舞台があり、またいくつかの会議室やリハーサル室等もあります。しかし、我が国に存在する施設の8割以上は赤字経営。不足分は、税金でカバーせざるを得ません。

通常、劇場ならば演劇や音楽の演目があるのが前提ですね。そうすると、劇場には演目がある時にしか、人が集まらない。それも興味を持つ観衆しか来ませんので、何も無い普段の日は閑古鳥が鳴いている状態が続きます。

ここで可児市文化創造センターをご紹介します。当施設は、今までの施設運営の概念を一変させ、多くの市民の憩いと交流の場として再生を果たした実例です。

◆人間の家としての公共劇場

人口10万人程度の可児市に、立派な文化芸能施設が造られて十数年が経過しました。オープン当時から、集客のために著名人や名だたる劇団を招き、何とか活気付けることに腐心したのです。

ところがご多間に漏れず、稼働率は徐々に右肩下がりの曲線を描くようになります。そこに一石を投じたのが衛紀生氏の登場でした。氏の劇場に対するコンセプトは「人の体温を感じさせる居場所」というものではないでしょうか、従来型の芝居を観たいとか、音楽を聴きたいといった特定の欲求を満たすだけの「殿堂」から脱皮することだったのです。

そこで真っ先に着手したのは施設を市民に開放すること。老若男女問わず、演劇やダンス、合唱などにチャレンジしたい個人や団体に呼び掛けました。

次に目を向けたのは、劇場に来られない人に光を当てることでした。スタッフが市内の学校や福祉施設に出向き、その場で文化イベントを作り上げていこうとする事業です。この働きが、ぐっと生活に文化を引き寄せる力となります。

そして本来的な目的である観客数増を狙い、チケットを2枚ずつ10年間通い続けてくれるファン獲得に奔走します。また経済的に苦しい家庭に対し、地元企業にスポンサーとなってもらい、無償で招待す

ることを継続中です。

◆愛好者より支持者作りを！

上記しました通り、劇場に縁のない市民を巻き込むために何をすべきか、という思いが活動の原動力です。館長自らが、お誕生日に劇場を訪れたお客に対し、メッセージカードを渡したり、また浴衣姿の来場者に、銭洗い弁天で洗った5年玉を渡したり、ちょっとした気配りもファン作りに欠かせません。また館内のレストランとタグを組み、フルコースメニュー付きでチケットを販売したり、出演者とのパーティーを開催したり、お客を喜ばせる企画も目白押しです。

既に多くの公共劇場は老朽化しております。我が泉区の公会堂でさえ、1年間かけて大規模な改修工事に入ります。施設をリニューアルするならば、中身も再整備する時期ではないでしょうか。

地域全体を抱き込み、一人一人が参画する意思を持たせることがキーポイントでしょう。同時に、働きかける側の人材育成も、不可欠のテーマですね。

【プロフィール】

- 昭和37年 7月28日 北海道生まれ 藤沢育ち
神奈川県立湘南高校・慶応義塾大学卒業後、サラリーマン生活を経て代議士秘書に…
- 平成 4年 「税は国家なり」との思いで始めた税理士試験に合格（平成10年に登録）
- 平成 7年 県議会議員初当選～平成19年まで連続3期
平成19年 第21回 参議院議員選挙 当選
予算委員会・ODA委員会などの理事を歴任
- 平成26年 第47回 衆議院議員選挙 当選
総務委員会&沖縄・北方領土委員会 両理事
国土交通ならびに厚生労働委員会 委員
- 平成29年 第48回 衆議院選挙出馬せず下野する
平成30年 一般社団法人 人づくり・国創り研究会を設立



前衆議院議員 / 元参議院議員